

5人の子どもたちを取り上げたダディ

産業医科大学 産科婦人科 櫻木俊秀

13年前、医師免許を取得したとき、将来5人の子どもの父となり、家事育児に追われながら学位を取得し、アメリカに研究留学することになるとは、夢にも思っていませんでした。「産婦人科って興味あるんですけど、忙しそうで…私生活や自分の時間を犠牲にしないとイケないのがネックです。」医学生や研修医の皆さんと話すと、こういった声をよく耳にします。でも、本当にそうでしょうか？少なくとも、我が家の場合は違います。

2021年の第16回出生動向基本調査によると、日本の家庭で子どもが2人の割合は50%、3人は17.7%、4人以上となるとわずか3.2%。さらに、共働き世帯の多くは「子どもの送迎や夕食準備、発熱時の対応」など、祖父母からの頻繁な支援を受けているのが一般的です。櫻木家はちょっと特殊で5人の子育てを、子の祖父母からの頻繁の支援を受けることなく共働きをしている7人家族です(皮膚科医の妻、10歳女兒、8歳男児、6歳男児、2歳女兒、1歳男児)。いろいろな意味で順風満帆な日々を過ごしています。

そんな中、私には長年の夢がありました。「アメリカで生活してみたい」という夢です。大学院に進学し、国際学会に参加し、同年代の仲間から刺激をもらう度に、この想いは強くなっていき、気づけば「自分に合った胎盤研究のラボはどこか」「家族と過ごすならどの州が理想的か」など、アメリカ50州すべてを調べていました。そして、ようやく行きたいラボを見つけたのですが、コネクションがありません。とりあえずメールを送ってみましたが、翌日お断りの連絡をいただきました。ただどうしてもこのラボで研究したいという思いが強くあり、(妻の許しを得て)カナダのモントリオールで開催された国際学会に参加しました。そこで偶然、そのラボのPI(研究責任者)と出会うことができ胎盤研究への熱意を全力で伝えました。その結果、念願のラボでの研究の機会を掴むことができました。もちろん、留学には「子どもたちの学校」「経済的負担」「臨床力の低下」「言語の壁」など、実にさまざまなハードルがあります。ただ自分の人生は一度きりです。“経験への投資”と割り切って挑戦したいと考えています。

最後に、周産期医療の面白さ、やりがいについて紹介させていただきます。おそらく、ポリクリやクリクラなどの臨床実習で分娩を見学した皆さんはお気づきだと思いますが、命がけで分娩に臨む母親はすごく勇敢です。そして私たちも皆、そんな母親から生まれてきました。一方で、残念ながらIUFD(子宮内胎児死亡)で紹介いただくケースもあります。暗闇のどん底にいるお母さんにどのような声掛けをして、退院まで導くか、この非常に繊細で倫理的なシチュエーションは産婦人科ならではの悩みだと思います。患者さんは医療従事者の言葉に大きな影響を受けます。あなたも悩める母親たちに、救いの言葉をかけてみませんか？

今では私は、「(子どもたちに)ダディがみんなを取り上げたんだよ」と、ちょっと誇らしげに話しています。

[著者略歴] **櫻木 俊秀**（さくらぎ としひで）

福岡県出身

2012 年 産業医科大学 卒業

2014 年 産業医科大学 後期修練医

2016 年 国立病院機構 小倉医療センター 産婦人科医員

2018 年 産業医科大学 産科婦人科学教室 助教

2020 年 ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング株式会社 専属産業医

2025 年 産業医科大学大学院医学研究科卒業

2025 年 9 月 コロラド大学 Jansson-Powell 研究室 訪問研究員

産婦人科専門医 母体・胎児専門医

～DEI 推進委員会より～

幸運の女神には前髪しかない

「幸運の女神には前髪しかない」という言葉が示すように、チャンスは一瞬のうちに通り過ぎてしまいます。だからこそ、目の前に訪れた好機をつかむしかありません。

5 人の子どもを育てながら共働きでキャリアを築く姿は、「医師＝仕事中心」という古い固定観念を軽々と打ち破ります。男性医師が育児や家事に積極的に関わることで、性別役割分担の見直しが進み、ワーク・ライフ・インテグレーション（仕事も生活も人生の一部として両立すること）が当たり前の社会へと近づくのです。

家族とともに実現したアメリカ研究留学も、まさに好機を逃さなかったからこそ掴めた夢でしょう。このエッセイを読んだあなたも、次に訪れるチャンスをためらわずつかみ取ってほしいと思います。

責任編集

DEI 推進委員会